

六甲山上の「まちっ子の森」と「散歩道」を活かす

堂馬 英二（六甲山を活用する会）

1. 13年の成果の柱は「森と歴史の散歩道」だ

設立以来14年目で、六甲山記念碑台周辺に「六甲山頂・森と歴史の散歩道」を実現して、その運用を図るといふ大きな実践成果を挙げている。「散歩道」と一体の「まちっ子の森」は、放置山林化した雑木林を六甲山上で唯一といえる環境学習林に整備し、自然体験に活用している。その契機になっているのは「アセビ伐採による森林再生の調査」の試みで現在も継続している。

これらの背景に、「六甲山魅力再発見市民セミナー」13期124回の継続開催がある。六甲山を広くまた深く知ることを実践し、3年毎に『六甲山物語1～4』を発刊している。「六甲山発郷土誌づくり」と言える実績やノウハウは、地域を学ぶ領域で全国的にもアピール可能だ。

「アセビ伐採調査」によって昔の六甲山の里山風景を再現できたが、森の変化を短期間で検証することは難しいので、地道な観察調査を継続している。ところが、標準の調査コードラートでの「実生新芽生育調査」3年目で、突然に例年の6倍以上という大量の実生新芽が発芽した。「アセビ伐採調査」の成果になる兆候を目にして、先駆事例をまとめて発表する気運を高めている。

「散歩道づくり」を通じて試行錯誤し、いろんな教訓やノウハウも培った。「まちっ子の森」や「散歩道」を物理的に点検・整備することと同時に、実践過程で蓄積した知見や情報を伝えることも課題にしている。山麓の市民や学生ボランティアなど、次の「担い手」を養成しつつ、山麓市民や幼少児家族を「散歩道」の有力な「使い手」に育むつもりで案内している。



2015.2「家族ぶら」体験ツアー



2016.8 六甲山健康散歩



2016.9 実生新芽生育調査

2. 「六甲山は誰のもの？」と問いかける

国立公園内で、私有の雑木林でアセビを伐採し、近畿自然歩道で山道整備を続けてきた。環境省や神戸市に「木竹の伐採許可」を申請し、地権者との貸借契約を年次更新し、活動資金を種々の助成先に求め、有志を募って活動してきた。市民団体が主導して推進する事業としては、労が多く荷が重い。社会的な課題に対してショートリリーフのつもりで寄与してきたが、この活動を移譲していく先が見当たらない。六甲山上の地域コミュニティは住民が減り高齢化し、環境保全に関わる余裕がない、地域の事業者からの協力や支援も期待できない、行政任せにもならない。

私たちの取り組みの根底には「六甲山は市民にとってこそ大切だ」という認識がある。お客さんとして六甲山で楽しむだけではこのような意識は芽生えない。六甲山の大半は私有地が占有し

ている状態で、土地所有者でない利用者は傍観者的な見方に立ちやすい。しかし、「市民の山だ。市民共有の環境資源だ」という意識が芽生えると、自発的な関わり方に転換できる。この「散歩道」づくりは、「六甲山は自分のものだ」と体感して認識を共有するという意義も宿している。

3. 次の「逸手^{いって}」は「アセビ伐採モデル」と「六甲山健康散歩」

これまでの整備活動を単純に維持継続するためにも、知恵や工夫を迫られる。対境関係や内部事情から克服すべき課題も山積している。そんな状況を打開するため、次に打つ手を思案している。「まちっ子の森」を活かす方向では、「アセビ伐採モデル」をまとめて、六甲山上の森林整備にアセビ伐採を反映したい。「散歩道」を活かす方向では、「六甲山健康散歩」を取り上げている。六甲山の持つ自然資源をそのまま生かせる「散歩」に、有力な方策と効用を補強したい。これらを足がかりに、市民の目線で六甲山の自然環境を自ら活かす試みを進める。